

あの子の記録

令木 千

どうしてわかってくれなかったのか。

ああ、わかるわけがなかったんだ。

だって私が黙っていたのだから。

正確には、本当に声が上手く出せなかったのだけど、それを知らうとする人はいなかった。いい子でいたかったから、死にたいって言えなかったんだ。ただ、それだけだったのに。中学三年の終わりから始まったそれは、私を離してくれなかった。無音で泣くことがうまくなった。どうしたって涙が溢れない日はなくて、誰かに知られるわけにはいかなかった。信頼を寄せてくれる人は多くいたはずなのに、信頼できる人がいなかった。ただずつと死にたかった。朝まで眠れない日はジブリの音楽を聴いた。カーテンから差し込む優しい青色が好きで、そのまま時が止まって欲しかった。このスペースは朝になると侵される。学校に、行かないさ。

不登校はいい子じゃない。ふと、リビングでネクタイを結んでいたら目から透明な血が溢れた。左を見るといつも通り母がぼうっとテレビを見ていた。あ、今辛いかもしれない。でも今泣くのは普通に言っておかしい。この水が見つかったら死にたいことがゆるかもしれない。ああよかった。もう声は出なくて。洗面所、洗面所。うん、大丈夫だね。

「だいじょうぶ」

だから、泣かないで。リュックを持って。友達が好き。外に出れば明るい私。行って、帰ってくる、それだけ。ほんのたまに使うお休みに、母は甘かったと思う。高校一年の終わり、五回しか休まなかったんだということを父に言ってみたとき。それ、誰と比べてののって嘲笑されちゃった。私、毎日死ぬことを考えるのに精一杯で苦しかった。褒められたかった、それだけだった。ねえパパ、昔私が泣いているところと言ったよね。汚えなつて。そのままタバコを吸いに行っちゃった。私はその日以来あなたの前では泣けないんだ。そして、高校二年後期のその日、何かが決壊した。今でも覚えている。いつも通りその夜は眠れなくて、何度も携帯で自殺について調べて、青い朝を迎えて、私はついに動けないと思った。学校なんてどうでもよかった。本当は、どうでもよくなかったからやるせなくてまた泣いた。いずれ部屋に入ってくる人は怒鳴るだろうけど、それはもう何もかもが遅くて。自分が鬱病だつてことは嫌でも気がついていたのに。死にたいことを言える人は唯一、同じ気持ちを持っている彼女だけ。手の震えが止まらないうつて笑うんだ。お互いにわかってた。自分でどうにかしなくちゃいけないの。その日は限界だった。私、お

かしいんだ。こんなに悩んだのにまだ死にたい。解決方法が見つからない。ねえママ、私死にたいよ。それをずっと前に言える関係であったなら。

今の私を救ってくれる可能性のある場所。精神科を携帯で示すと、ドアに寄りかかる母は怪訝な顔をした。やっぱり。着いた先で私は久しぶりに、母が隣にいるというのに泣いてしまった。わからないけど、止められるものじゃなかったんだ。死にたいという気持ちをもう隠さなくてもいいのか？ そう思っていた。でもそれは受け入れられなかった。診断を聞いた母は不可解そうだったのを覚えている。……あ、私の悪口、そこで言うんだ。今、涙溢れてるんだけどな。彼女は本当にこの二年間どころか、隣にいる今も私のことが見えていないんだ。部屋を出てから「ああ、そうか」と思った。きっと、私が助けを求めたのはどこかの知らない先生じゃなくて、あなただった。

「だいじょうぶ」

家で何回もおまじないを使った。泣いてしまう時はいつも喉に石が詰まったみたいに痛くって、何度も両手で締めるみたいに抑えた。大丈夫、人はいずれ死ぬ。大丈夫、私はそばにいる。大丈夫、ここに味方はいなくても。気がつけば一人で歌っていた。苦しかった。ずっと。多分、好きな人を好きだと言えない。それに尽きる。大切な人だったのに傷つけられた。その心がもう好きを認めることができない。人はいずれ死んでしまうというのに、私は許すこともできないのかとまた悲しくなって、ただ布団が恋しくなる。ずっと、もうずっと、辛いと零すことがこの家では許されていないような気がしていた。そして、それはみんな同じであるような気がしていた。だから逃げた。

希望となった絵が私を導く。遠く遠く、泣ける場所を求めて。不安はなかった。今更死ぬこと以外の不安なんて不安に入らなかったんだ。結果として、私はとてもいいところを見つけた。初めて私が入れた、弱さを吐ける場所だった。好きな時間に出歩いて、考えが溶けるまで湯煎につかった。用事がなければお昼まで眠って、久しぶりにお腹が空いていた。ここには誰も入ってくることはない。ちゃんと、安全な場所だった。歌って踊って、書いた。描いた。かつてこの手から落ちたものを拾い直してみることにして、そのための環境と時間があることに、私はまた少し泣いた。喉は苦しくならなかった。

母は私が好きだった。兄は私が好きだった。父も、多分私を好きだった。私も好きだった。もう、伝わらなくていい。謝り足りないのはこの世へ生まれたことだったか、あれだけ考えてもわからなかったんだからそれももういい。まだ悲しさは残っていて、それはいつでも私を襲うのだけれど、今は少しの安寧を抱きしめて眠っていたい。願わくば、目覚めませんように。